

第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の問題 ②

前おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第2節 言文一致運動と「おふでさき」

和辻は「日本語と哲学の問題」において、「あるということはどういうことであるか」という日本語を形成している言語が、われわれに教えるところを求めて「こと」「もの」「ある」「あり」などの日常言語の意味構造を存在論や言語学を駆使して克明に解析している。そのくわしい解説については『日本語の哲学へ』（長谷川三千子、ちくま書房）の第四章「ハイデッガーと和辻哲郎」の項を参照いただきたい。「おふでさき」にも、断定の意を表す口語体「である」が、明治2（1869）年、言文一致運動が日本で開花する以前に、第一号49番の和歌において「細道をだんへへ越せば大道やこれが確かな本道である」と文章言語として表出されているのは、日本近代文学史上の驚きであると国語学者吉田九郎は述べている（「お筆先」修辞考—『日本文化』第十三号、八四頁）。この断定調の言文一致体「である」は、明治8年書の次の「おふでさき」にもあらわれている。

この世の地と天とは実の親 それより出来た人間である。（十号54）
胸先へきびしく聞へ来たるなら 月日の心急き込みである。（十一号1）

元治元年生まれの二葉亭四迷（1864～1909）は、新しい文章の規格を求めて、坪内逍遙から、当時評判であった円朝の落語の速記を参考にしてはという示唆をうけ、口頭語による文章の形を創作することに苦心した。『浮雲』は、その処女作であり、彼は日本の近代小説の開祖となった。ツルゲーネフの翻訳「あひびき」「めぐりあい」における美しい本格的な文章は、後年の自然主義作家たちに大きな影響をおよぼし、言文一致体は、小説の一般的文体となり、現代に至っていると言われる。『浮雲』が出版された1888年は、明治21年にあたり、教祖一年祭が執行され、4月に天理教会設置願書が東京府知事に提出され認可されたのち、7月に天理教会本部は奈良県に移転され、東京は出張所となった年にあたる。わが国における言文一致体運動発生20年も前に、「である」調が、明治2年筆の「おふでさき」（一号49）に用例としてすでにあらわれていたのは驚きである。

ちなみに、東京朝日新聞の特派員として渡露、病に倒れ賀茂丸にてロシアよりの帰国途上、ベンガル湾上で客死し、茶毘に附された二葉亭四迷の終焉之碑は、シンガポールの日本人墓地にあり、その遺骨は東京染井墓地に埋葬されたが、その終焉之碑は大正5年頃から、からゆきさんの世話取りをしながら布教していた板倉タカの墓のそばにある。天理教シンガポール出張所開設のために、政府からの布教認可を取ることに走り回っていたわたくしは、同時に八百数十基を数える墓石の調査や清掃に一人であたっていた。ちょうどマレーシア政府よりシンガポールが独立して11年目頃であったと記憶している。シンガポール政府が国家開発のために無縁墓地がおおく管理が行き届いてない土地を開発候補地に挙げ、この日本人墓地もとりこぼち40数番目の候補地に挙げられていた。それを阻止しようと墓地調査の資料をまとめ、天理教シンガポール出張所に天理日本文化センターを市内中心地に建設されたホンレオン高層ビルの一部に併設し、在星日本人会と協力して、政府関係部署に対して墓地保存の条件を満たす努力をした。その写真や資料は大使館や天理図書館にも寄贈してある。わたくしは四迷がペテルブルグより帰朝の途次、ベンガル湾上で肺結核により船中客死し、シンガポールで茶毘に付された史実については知っていたのである。四迷が「ダデス調」を主張し、「デアリマス調」を提案した山田美妙斎（1868～1910）や、「デアル」調を尾崎紅葉（1867～1903）とその一派がもちいて、紅葉が『多情多恨』を明治29年に口語文で出版するに及んで、その磨かれた文章は称賛をあげ、言文一致はようやく

安定した力を示したといわれる。口語文章用語の力点は異なっていたが、四迷が現代の言文一致の文体とともに日本近代文学の開花期を担った文人の一人であったという史実は、わたくしがシンガポール布教時代に知ることとなったのだった。それがのちほど『おふでさき』の「である」調発見につながるのはいま考えてみると不思議なことである。

『多情多恨』が出版された明治29年は、教祖十年祭が執行された年であり、その直後内務省訓令甲第十二号発令により、「天理大神」と称する神名変更やつとめの規制など、社会の反対攻撃がはげしくなり、「天理教会の毒害」等多数の攻撃文書が出版され、燎原の火の如く広がる天理教への攻撃の演説会が各地で行われたことなど合図立て合っている。『日本国語大辞典』（小学館）によれば「でーある」の項で、尾崎紅葉の『二人女房』（1891）の「ぐつと肝頭（きもさき）に徹（こた）へたのである」と夏目漱石『吾輩は猫である』（1905）の「吾輩は猫である。名前はまだ無い」が例文として挙げられている。前者の「である」は先に引用した「おふでさき」十一号1番、後者は十号54番の断定的表現をもつ両文章の形と解釈に通じるかすかな意味が連想され、その共時性におどろかされる。

「である」という口語体は鎌倉時代に発生し、室町時代に発達した日常用語で、『大辞泉』によれば「じゃ」「だ」はこれから出たものとされる。言文一致は現代では文章語・演説口調の常体として用いられ、教科書の国定制度によって、国語の文章が統一され、小学読本・高等小学読本においては言文一致の文章を多く採用し、標準語教育に貢献した。教育・文芸、新聞・雑誌の文章にも口語体が増加して、大新聞社の社説も大正11年には口語体を採用し、勅語・法令・公用文以外は、文語を使わなくなり、ラジオ放送が開始された大正14年からは耳で聴く言語の価値が、人々にみとめられる時代が到来したのである。このような言文一致体の価値ある標準的言語が「おふでさき」や「みかぐらうた」に先進的にあらわれるのは、漢語体表記を主とする数おおくのわが国の既成宗教や新宗教の原典とくらべて、天理教原典の傑出した言語表象のもつ独自性である。

さて、話題は本題からそれははじめたのもともにもどし、ここで和辻の「こと」「もの」「ある」「あり」など、やまとことばの意味をめぐって考察された「日本語と哲学の問題」の締めくくりの文章をまずおさえておきたい。

「日本人は何ゆえに彼らの活きた言葉をもって考えようとしないのであろうか。平俗な言葉を使うのが学者の権威をそこなうがゆえであらうか。あるいは澆刺たる生の内容を担った言葉をコナシ切れず、すでに哲学語として使い古された言葉の翻訳を必要とするのであろうか。我々はそのいずれであるかを知らない。が、ドイツの哲学者が Sein を哲学の中心問題として取り扱うときには、この語が最も日常的な言葉であることを、決して忘れていたのではない。だからこそ哲学の中心問題が、存在論的に我々の日常生活に密着しつつ、存在論的にそこから最も遠いと言ひ得るのである。日常の言語から遠のいた哲学は決して幸福な哲学ではない。思えば永い間のラテン語の桎梏から猛然とて己を解き放した百余年前のドイツの哲学者たちは、それによって同時に哲学をば澆刺として生きたものにしたのであった。かかる仕事はまことに大力量の士を必要とす。が、大力量の士は彼を待望する時勢によって生みだされてくるのである。我々はここにかかる待望の声をあげる。日本語は哲学的思索にとって不向きな言語ではない。しかもそれは哲学的思索にとっていまだ処女である。日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいよ。」